

## 雑誌『女聲』の婦人論をめぐって

### ―一九三〇―一九四〇年代の上海におけるフェミニズム―

張 備

#### はじめに

一九三〇年代の上海は、都市化が急速に進行した時期であった。都市の規模が大きくなっていくにつれ、高層ビル、銀行、ダンスホール、映画館などが大量に現れ、市民たちの生活が西洋化した時期であったとも言える。こうした経済と文化の繁盛は、メディア界にも影響を与えた。趙蓓紅が「一九二八―一九三七年八月間、上海で新たに出版された女性向け定期刊行物は約三九種類ある」<sup>(1)</sup>と述べているように、この時期に女性雑誌は数多く刊行された。また、一九一九年の五四運動以降、中国の女性解放運動が高まり、女性たちが女性雑誌という場を通じて、「自由平等」に対する要望を強く呼びかけた時期でもあった。そのため、近代上海の女性雑誌に関する研究は、この時期に集中している<sup>(2)</sup>。一方で、一九四〇年代に入ると、上海における女性解放運動は政治的な弾圧を受けて低迷期に入る。その結果、「一九三八―一九四五年戦争勝利前までの、上海の女性向けの定期刊行物は約二一種類ある。刊行期間は基本的に短く、一号で廃刊になったものは四三%、一ヶ月から一年未満のものは三三%、一年以上刊行されたものは二三

%であった」<sup>(3)</sup>というように、一九四〇年代の上海の女性雑誌は減少していった。それ故に、一九三八年以降の女性雑誌はあまり注目されてこなかったのである。しかしながら、各時代の女性思想は単独で存在するのではなく、すべて繋がっているはずである。そのため、近代中国の女性解放思想の全貌を掴むためには、戦争が激化していく一九四〇年代の「婦人論」(本稿では、同時代の用語として「婦人論」という語を使用する)も無視できないものであると考えられる。

雑誌『女聲』は一九四二年から一九四五年の間、上海で発行されていた女性雑誌である。編集長は日本人作家の田村俊子であり、南京国民政府と日本軍部を背景に有している。『女聲』に見られる女性思想とその傾向について、これまでの研究では主に編集長の田村俊子の思想と繋げて語られてきた。例えば、山崎真紀子<sup>(4)</sup>は、『女聲』以前の俊子の女性思想をまとめ、「信箱」欄の投稿を紹介している。そして第二巻七期以降の「男性の声の介入」ということに目を向け、「俊子没後に編集発行人になった関露との「私たち」の声を引き裂いたのは、「男の声」、つまり、国家の声であり、個人を超えた教条的な思想ではなかっただろうか」と指摘している。段毅琳<sup>(5)</sup>は、『女聲』に掲載されて

いる知堂（本名は周作人、親日文人、特別寄稿者）<sup>(6)</sup>の評論「女子與讀書」（『女子と讀書』2110）からみる主張と『女聲』の女性観との比較を通して周作人の女性観を分析した。段は『女聲』の女性観を論じる際に、「信箱」（読者投書欄に当たる）を分析の対象とし、「関露が執筆した評論欄と同様に、『女聲』雑誌の女性思想が集中して体现されている」と述べている。また、「伝統思想への反抗」と「女性と職業」に関する読者の投稿をいくつか取り上げて分析し、「周作人は社会状況を鑑み男女平等という視点から女性啓蒙を行ない「性の解放」をより優先させたことに比して『女聲』雑誌は社会と家庭制度の両面を揚げたものの、より女性の社会性を強調した」とまとめている。段は関露の思想＝俊子の思想＝『女聲』の思想という図式で『女聲』の女性観を分析している。しかし、「信箱」の内容は俊子自身が返答を行っており、あくまで俊子の女性観であるため、単純に『女聲』の女性観と同一視することはできないと考えられる。

また、中国人編集者の関露も「評論」コラムを担当し、数多くの女性解放論を書いたことで、研究者たちに注目されてきた。呉佩珍<sup>(7)</sup>は、俊子のカナダにおける労働運動の体験、関露の作品と評論、そして第二回大東亜文学者大会を考察し、俊子と関露との「連帯関係」を明らかにした。主に俊子と関露の社会主義思想の背景に注目している。雑誌『女聲』が表している女性観とは編集者だけではなく、誌面を飾った全ての婦人論から構成されていると言えよう。関露と俊子が書いたものの以外にも多くの婦人論の投稿が見られる。故に、『女聲』の女性思想と傾向を把握するためには、その他の婦人論の具体的な内容をも確認すべきだと考える。

そこで、本稿では、一九三〇年代の中国で話題となった「婦女回家」（『女性は家に帰れ』）・「良妻賢母」、そして「女性と国家」という問題を取り上げ、『女聲』の婦人論の特徴を明らかにしたい。一九四〇年代に刊行された『女聲』で、一九三〇年代の上海の雑誌で話題となっていた女性問題が、どのように論じられているのかを確認し、研究の手薄な一九四〇年代の女性雑誌における女性思想の空白を埋めることを目的とする。

## 一 一九三〇年代の上海におけるフェミニズム

一九三〇年代初頭、アメリカを皮切りに、資本主義世界では深刻な経済恐慌が起こった。そこでドイツでは、「一九三三年一月三〇日に権力を掌握すると、ナチ党は女性上級公務員を解雇して労働市場から女性を排除し、女性を家庭に戻す政策を取」<sup>(8)</sup>り、男性の就職機会を増加させようとした。一九三四年、ヒトラーはニュルンベルクの党大会の女性会議における演説で、次のように述べている。

男性の世界は国家であり、男性の世界は戦うことであり、共同体のために尽力することであるといえるなら、女性の世界はもっと小さな世界だといえるかもしれない。なぜなら、女性の世界は夫であり、家族であり、子どもたちであり、家だからである<sup>(9)</sup>。

ドイツには「3K」（子ども、台所、教会）と言われる女性のあるべ

き姿を規定する伝統的な価値観がある<sup>(10)</sup>。夫と子供を世話し、教会の道徳律を守り、子供を産み育てることこそが、女性の役目というものである。ヒトラーが演説で主張していることは、このような伝統的な価値観と一致する。いずれも男性と女性を二分化し、「女性の世界」を家庭という枠組みに制限しようとするものである。

こうした女性の社会進出を制限しようとする欧米諸国の女性政策を参考にして、一九三四年二月、蒋介石は、近代国家に必要な国民を養成するために、「礼義廉恥」という儒教文化を提唱する「新生活運動」を推進し始めた。伝統の礼節を重視する「新生活運動」の展開とともに、「良妻賢母」、「三従四徳」などの旧礼教が復活し、新たに「復古」思潮が引き起こされた。そして、すでに社会に出た女性は家庭に帰って、職業を男性に残すべきだという「婦女回家」（女性は家に帰れ）<sup>(11)</sup>の主張もこの時期に現れた。

こうした世界的情勢及び国民政府の政策に反応し、一九三〇年代と一九四〇年代初頭、上海のメディア界では、「婦女回家」や「良妻賢母」などの旧道徳をめぐる論争が起こった。特に女性問題に最も注目する女性雑誌において、各階層各党派の人々は積極的に議論した<sup>(12)</sup>。近代中国の婦人論について研究を行ってきた江上幸子は、この一九三〇、四〇年代に表れた言説を「A…賢妻良母派（清末型）、B…新賢妻良母派（近代家族型）、C…新賢良派（家庭・職業両立派）、D…賢妻良母否定派（経済自立・社会変革型）」<sup>(13)</sup>の四つに分けている。

かつて清朝末期に現れた「良妻賢母思想」は近代中国女性の覚醒により、五四運動の中で封建思想として激しく批判された。江上がAとして分類している「賢妻良母派（清末型）」の人々の発言は、伝統的

家庭を前提とした「封建的」なものであるため、進歩的な思想を持つフェミニストたちから直ちに反論を受けた。初期の「婦女回家」という主張も旧来の「良妻賢母思想」と同一のものでして批判されていた。例えば、柳眉君は「もし職業女性が社会から抜け出したら、自分の才能と仕事のチャンスが無駄にするだけではなく、社会の発展を促す力も奪われてしまう」、「だから私たちは「婦女回家運動」のような時代に逆行する運動を軽視してはいけない。言論で、真つ向から痛撃を与え、彼らの宣伝を止めるべきだ」（「婦女回家運動」『女聲（一九三二）』<sup>(14)</sup>一九三四年一〇月）と、「婦女回家」の主張を強く批判している。

また、戴莎は「婦女回家運動之檢討」（「婦女回家運動の検討」『婦女共鳴』第四卷第八期、一九三五年）で、次のように述べている。

日本語訳…女性が家に隠れるのは封建時代の産物である。昔の自然経済はすでに商品経済に変わった。女性が家庭の付属品である時代は過ぎ去った。時代は常に前へ進んでいるので、誰であるうと時代を止めることができない。ドイツにおいて女性が家に帰るのは一時的かつ強制的な政策の結果であり、決して長くは続かない。女性は必ず社会に戻ってくる<sup>(15)</sup>。

このように戴莎は、「婦女回家」の主張は封建時代の産物で、時代に逆行していると指摘している。また、今の女性は「家庭の付属品」ではなく、時代の流れから見ると、女性が社会に戻るのには必然の結果だと述べている。

右のような批判を受けて現れたのが、改良された「良妻賢母主義」、

即ち「新良妻賢母主義」（江上が分類した「B…新賢妻良母派（近代家族型）」に当たる）である。

一九三四年、中華婦女節制会会長の劉王立明は、「女性は解放を求めるなら、まず職業が必要である。既婚女性の職業は良妻賢母・家事・産児制限である。この三つの責任を全部果たしてから社会に出るべきである」（<sup>16</sup>）と述べた。さらに、素娟の「賢妻良母之我見」（「良妻賢母についての考え」『慈儉婦女』第二卷第一〇期、一九四一年）には、「良妻賢母は新しい時代の幸福な家庭を築くための源泉であり、子供の徳、智、体を増進する母体でもある」（<sup>17</sup>）と説かれた。

以上の一連の主張から分かるように、「新良妻賢母」は、伝統的大家庭（父が中心）ではなく、近代小家族（夫が中心）を前提としている。

「新良妻賢母主義」は、「良き妻、良き母」を女性の天職として位置付け、女性はまず家庭の責任を果たしてから社会への貢献を考えるべきだと主張する。「婦女回家」の主張も「新良妻賢母」と同じく、女性は社会に出るべきではないと主張するより、女性は家庭を優先すべきだという意味へ変えていく。「婦女回家」も「新良妻賢母」も、その根本は、すでに社会へ進出し始めた女性たちを家庭という枠へ再び閉じ込めようとする一つの手段に過ぎないのである。

また、女性の家庭への責任を一方的に強調する「新良妻賢母」に対して、「良妻賢母」と同時に「良夫賢父」を強調する、いわゆる「C…新賢良派（家庭・職業両立派）」も現れた。例えば、峙山は「答宇晴君…婦女回家庭與賢妻良母的檢討」（「宇晴君に答えて…婦女回家と良妻賢母の検討」『婦女共鳴』第四卷第九期、一九三五年九月）で、「すでに家庭から出て社会に入った女性を家へ返すことには反対するが、まだ

家庭から出ていない、または失業して家庭に戻った女性は、良夫賢父の環境において、良妻賢母になるべきだ」（<sup>18</sup>）との意見を述べている。

このような「新賢良」の主張は、従来の性別分業の意識が強いものであり、「A…賢妻良母派（清末型）」と「B…新賢妻良母派（近代家族型）」の折衷案として考えることができる。

一方、『婦女園地』『婦女生活』『女子月刊』などの女性雑誌に集まった進歩的な女性たち（「D…賢妻良母否定派（経済自立・社会変革型）」に当たる）は、「新良妻賢母」と「新賢良」両方を批判し、女性の経済的自立と解放の必要性を述べる。上官公僕は『女子月刊』で、次のように述べている。

日本語訳…良妻賢母主義に反対するのは、女性は良妻賢母になつてはいけないということではない。ただ良妻賢母で女性を束縛したり、弾圧したりしてはいけないと思うのである。男性は人間であり、女性も人間である。どちらとも人間であるため、女性も人間としての義務を果たし、権利を享受するべきである。彼女たちも社会、政治、経済、教育、各方面の活動に参加し、そして社会の改造運動から、自分たちの地位向上、自由の幸福を追求するべきである（<sup>19</sup>）。

女性は「妻」と「母」である前に、一人の人間であるため、積極的に社会生活に参入するべきだと主張している。また、『婦女生活』の羅瓊は、『婦女共鳴』が持ち出した「新賢良」について、次の反論を挙げている。

日本語訳…新賢良主義者は積極的に合理的社会を作らずに、男性も家に帰るべきだと主張し、家庭という籠の中で社会の問題を解決しようとしている。あくまでもユートピアの夢に過ぎない。

新賢良主義は実際、「婦女回家」主義の別の形であり、他の復古運動と完全に一致している。いや、むしろさらに劣っている。男子が家に帰って大人しく良夫賢父になることを要求しているからである。従ってえらい人たちは誰にも邪魔されずにのんびり働けるのである<sup>(20)</sup>。

右の「えらい人たち」とは、「統治階層の人たち」を指す。羅瓊は、女性問題を解決するには、社会改造から着手しなければならないと指摘しており、「新賢良」はブルジョア階級の幻想でしかなく、結局のところ「婦女回家」、「新良妻賢母」と同じものだと批判している。

ここまで、一九三〇年代前半の「婦女回家」と「良妻賢母」をめぐる論争について、大まかに見てきた。前述のように、江上幸子はこれらの言論を四つの類型に分けているが、実際には、保守派（賢妻良母派、新賢妻良母派、新賢良派）と革新派（賢妻良母否定派）という二つの大きなグループに分けられる。また、ここまで論じてきた「婦女回家」と「新良妻賢母主義」に関する婦人論は、結局のところ女性と家庭と職業の関係の問題、つまり女性の社会における位置づけの問題だと言える。

ところが、このような論争の中で、もう一つ大きな問題が浮かび上

がってくる。それは女性と国家の問題である。一九三〇年代後半、特に一九三七年日本と中国の全面的な戦争が始まり、戦時下女性の任務および国家との関係について、以前より多く論じられるようになった。旅岡と陳蔭萱は、以下のように述べている。

日本語訳…中国の女性問題は、全世界の女性問題と繋がっている。同時に、女性問題は社会問題の一環であり、旧社会の変革が起らない限り、女性問題が解決することはない。（中略）「五四」時代より一層勇敢、一層徹底、一層果敢でなければならない！今の餓えた虎のような封建勢力と帝国主義との関連性を認識し、そして反帝国主義反封建主義を女性解放運動及び中国の民族独立運動の主な任務として見なすべきである！<sup>(21)</sup>（旅岡）

女性は中華民族の半数を占めているため、民族復興の使命を担い、国を危機から救うべきである。これは誰にも否定できないことである。（中略）女性も時代の使命を背負い、国を救うため、社会における職務を捨てて家庭に戻ってはならない<sup>(22)</sup>。（陳蔭萱）

このように、共産党系の『婦女園地』『申報』女性欄）、『婦女生活』そして『女子月刊』といった進歩的な雑誌は、民族解放を女性解放運動の第一の任務として位置付け、女性解放運動の重点を「反帝国主義反封建主義」に移そうとしたのである<sup>(23)</sup>。

そして、これまで「新良妻賢母」を支持していた国民党系の『婦女週刊』（『中央日報』副刊）でさえも、女性の国民性と就労の重要性を



強調し始めた。その中でも一九三六年に、繆玉鍾は「我々中国は空前の国難に臨んでいる。女性を訓練し、実際の職業生活へ導いていく必要がある。それは非常時期のための準備である」<sup>(24)</sup>と、女性が社会に出て働く必要性について述べている。しかし、女性生活の集団化、女性の職種の拡大、各階層女性の助け合い、女性の参政権の要求<sup>(25)</sup>などを主張する左翼的な雑誌に対し、『婦女週刊』における言論はより保守的で、提案も節約、就職など個人の範囲に集中している。

## 二 一九四〇年代の『女聲』の場合

以上、一九三〇年代に話題となっていた「婦女回家」・「良妻賢母」論争、および「女性と国家」をめぐる討論の概略を確認してきた。では、一九四〇年代に入って、これらの問題は雑誌『女聲』において、どのように論じられたのか。

『女聲』の婦人論の具体的な内容を分析する前に、まず、『女聲』の婦人論は、意見が異なる投稿が多いという大きな特徴を念頭に置く必要がある。時に真逆の主張をしている婦人論も見られる。

五四運動以来、女性が主導する女性解放運動が高まり、女性雑誌も次々と創刊された。この時期の女性雑誌は政党、学校や各社会組織によって作られたものが大半であり、同人誌と機関誌の性格が強い。一九三〇年代に入ると、『玲瓏』、『婦人画報』などの商業誌と国民政府、日本軍部のプロパガンダ誌が増加した<sup>(26)</sup>。しかし、これらの雑誌の大半が、固定された執筆者グループを持つものか、そもそも婦人論を

重視していないものであった。時勢の変化によって、雑誌の全体的な傾向が変化しても、『女聲』のように真逆の主張をする婦人論を同時期に多く掲載する女性雑誌は見られなかった。このような『女聲』の婦人論の特徴は、主に『女聲』の執筆者の複雑性によるものであると考えられる。

一九三七年第二次上海事変後、上海の共同租界とフランス租界において、一時的に反日言論を掲載した刊行物が多く現れた。ところが、一九四二年に上海が日本軍に全面的に占領され、刊行物に対する統制が強まったため、それらの刊行物のほとんどが言論の傾向を変更したり、停刊したりした。共産党の反日の活動も地下へ移転し、残存していた雑誌に投稿することによってひそかに反日思想を宣伝しようとしていた。共産党地下黨員で、『女聲』投稿者の丁景唐の回想によると、「私たち（共産党地下黨員たち、稿者注）は当時発行されていた刊行物を考察し」たが、「それらの雑誌のほとんどはすでに固定の作者グループを持ち、一部の関係者によって独占されていた。それに各雑誌は独自の個性があり、一般の投稿は採用されにくい」<sup>(27)</sup>。故に、『女聲』のような新人作者からの投稿を歓迎する女性雑誌は、すぐに地下黨員たちの注意を引いた。一方、『女聲』は、日本軍部と南京国民政府に迎合するプロパガンダ雑誌として誕生し、そして田村俊子という日本人編集者を迎えた雑誌であるため、当然のことながら、国民政府の関係者と親日派の文人の投稿も少なくはなく、両極端の発言が出るのも不思議ではない。

次に『女聲』における「婦女回家」・「良妻賢母」、および「女性と国家」に関する婦人論の内容を見ていく。

① 「婦女回家」と「良妻賢母」

『女聲』における「婦女回家」と「良妻賢母」の討論は、主に、女性  
は家庭を優先すべきか、就職して社会へ貢献すべきかという問題をめ  
ぐって展開されている。

万孟婉は「婦女職業問題的再検討」（「女性の職業問題の再検討」<sup>1</sup>  
<sup>1</sup>2）で、女性の職業生活と家庭生活について次のように論じている。

日本語訳…女性が経済、政治、社会において男性と平等の地位  
を獲得しようとするのであれば、経済的独立が先決である。

筆者はすべての女性が家庭のことを捨てて仕事を探しに行く  
ことに賛成しているわけではない。正直に言うと、良妻賢母にな  
ることが出来る女性達に対して、筆者はいつも深く尊敬している。  
最近、すべての女性は家庭に帰れ、或いは台所へ帰れという主張  
がある。このような「良妻賢母」を女性が国家に果たすべき唯一  
の義務だと考える主張は、少し言いすぎであると思う。（中略）エ  
レン・ケイ女史はかつて「女性は最大の天職がある。この天職を  
怠らない限りであれば、職業を探しても良い……」と言った。筆  
者はこの主張に賛成している。

万孟婉はまず女性が男性と平等になるためには、経済的自立を実現  
しなければならず、そして経済的自立は職業によって達成できると指  
摘している。また、当時の「婦女回家」というスローガンは言い過ぎ  
だと批判している。万孟婉の論は一見すると「新良妻賢母」主義を批  
判する論だと思われる。しかし、論の後半で、万は「すべての女性が

職業を探しに行くのを賛成しているわけではない」と言い、女性には  
天職があり、家庭への責任を果たしてから就職を考えるべきだと主張  
している。さらに、家庭生活より職業生活を優先にする職業女性に完  
全に「自己本位」だと批判している。ここで中心となるのは「女性に  
は天職がある」という観点だと考えられる。つまり、万は基本的に従  
来の男女の性別役割分業に賛同しているわけである。

万孟婉と似たような観点を持つている論として、文英の「婦女如何  
踏進社会」（「女性はどうのように社会へ進出すべきか」<sup>1-3</sup>）が挙げら  
れる。文英は、まず「男女の完全な平等」を主張する「急進派」は「あ  
らかじめ決められている男女の体質の違い」を忘れたと批判している。  
また、男女の「知力、体力、生理的な機能などの違いのため、同じよ  
うな仕事を背負うことは不可能だ」と指摘している。そのため、「女性  
は自分の立つべき位置で、自分の天職を果たすべきだ。もし客観的条  
件や自分の能力が許す範囲内なら、女性も適当な職務を務めていい」。  
文英の論も万孟婉の論も、「性別役割分業」と「女性の天職」の合理性  
を肯定しながら、女性は家事や育児などをしてから、仕事をすべきだ  
と主張している。つまり、二人とも「新良妻賢母」の賛同者である。  
また、以上の二つの論よりはつきりと「良妻賢母」を鼓吹する論も  
いくつか見られる。例えば、陳翠珠の「女性與家庭」（「女性と家庭」  
2-6）と馬博良（雑誌『文潮』の編集長、特別寄稿だと考えられる）  
の「新女性中心改進説」（「新女性を目指して」3-10）には、次のよ  
うな文がある。

日本語訳…どんな家庭制度においても、良妻賢母という原則は

守らなければならないと思う。(中略)女性に良妻賢母以外の義務がないとは言っていない。ただ良妻賢母は女性にとって一番似合う、一番偉大な義務だと言っているだけだ。(「女性と家庭」)

新しい時代は中国の少女たちに一種の権利を与えている。そして一種の束縛と迫害も与えている。善良な少女たちは、一時の衝動で、旧い道徳を捨てて、新しいものをすべて受け入れ、優れていた本性を抹殺した。

私は女性が家庭から出て社会に入ることを賛成しない。良妻賢母になれば天職を果たしたと言える。(中略)家庭を捨てることは非合理的である。(「新女性を目指して」)

両者とも「良妻賢母」は捨ててはいけない良い伝統的道徳であり、女性の天職であると主張している。さらに、馬博良は「良妻賢母」こそ女性が社会的地位や他人の尊重を得る一番の近道だと断言している。これらの論者は明らかに当時の「婦女回家」という輿論の支持者だと言える。なお、知堂は直接「良妻賢母」を評価していないが、与謝野晶子の文章を紹介する形で、「良妻賢母」主義を認めている(「女子と読書」(「女子と読書」210)。

一方、「新良妻賢母」と「婦女回家」の支持者を批判し、女性の就職を勧める論もあった。編集者の一人である関露は「結婚以後的婦女與社會的關係」(「既婚女性と社会との関係」117)で、「女性は明らかに社会の一部であり、家事や育児より優れている知恵と才能を持っている。なぜ自分の更なる発展を犠牲にして、家にばかり集中して国を

忘れる人になるのか」、「女性は結婚しても社会に属している」と主張している。

また、周玉は、外国の専門家の調査結果を引用し、女性の知力と力は男性より劣っていないことを証明し、「婦女回家」を否定している。

そして、コロンビアの歴史学の教授の言葉を引用し、人類の文明は人の体力によつて発展してきたわけではないため、たとえ女性の体力が男性より劣っていたとしても社会文明の発展へ大きな影響を与えることができ、家庭事務も女性しかできないことではないと主張している。(「也談婦女、家庭、婚姻」(「女性、家庭、結婚も語る」412)

さらに、柳萍は「漫談職業女子の現況厄運和修養」(「職業女性の現況、厄運と修養に関して」215)において、まず近年の職業女性の数は増えたが、実際ではまだ男性と同じレベルの仕事ができず、給料も男性より低いと指摘している。そして女性に「男性と同じような教育を受ける権利」、「均等な雇用機会」、「同じ金額の報酬」と「特別な状況における優待や保護」を与え、「誠意をもつて女性を助ける」べきだと呼びかけている。

これらの論者は、前述した「良妻賢母」または「新良妻賢母」の賛同者とは違って、家庭より女性の就職と独立の切迫性と必要性に目を向け、女性は必ずしも「良妻賢母」、あるいは家庭的である必要はないと論じている。

以上のことから、『女聲』の「婦女回家」と「良妻賢母」に関する婦人論には、「女性の天職」、「伝統文化」などを強調し、「婦女回家」と「良妻賢母」を支持する「賢妻良母派」と「新賢妻良母派」(「保守派」)が存在する一方で、女性の経済自立と社会変革を呼びかける「賢妻良



母否定派」(「革新派」)の双方が存在していることがわかる。それらの論調に一九三〇年代の「婦女回家」・「良妻賢母」論争との大きな変化と相違は見当たらなかった。

## ② 女性と国家

一九四〇年代の上海、ないし全中国において、日中戦争は深刻な状況になり、最終決戦が始まる寸前であった。このような状況で、女性には各党派が奪い合う資源となった。『女聲』においても、政治的立場が異なる執筆者たちは各自の立場から、女性と国家の関係について言及している。特に第二巻以降、日本と中国の最終決戦が始まると、女性と国家、民族の関係はなおさら頻繁に論じられるようになった。

その中で、一九四四年一月に発行された新年号である第二巻第九期の「全國婦女一九四四年的展望」(「一九四四年、全國女性の展望」)において、余極は、一九四四年の女性は「智仁勇」の女性であるべきだと自身の期待を述べている。論者は「智」を自分の技能と知識を高め、そして実践に生かすことだと捉え、「仁」と「勇」について、次のような解釈を加えている。

日本語訳：「仁」とは、博愛のことだ。特に幼い孤児たちを大切に守るべきである。第一は「子供を教育すること、家庭で自分と兄弟の子供を教育することである。また、隣人、村の住民、貧しい孤児などのために字を教える塾を作り、愛国思想を教え込み、軽い生産活動もやらせるべきだ。

(「勇」に関して、稿者注) その次は「勇敢に国を愛すること」

であり、これらの行動すべてが国家の利益を前提としている。国旗を見ると、肅然として襟を正すべきだ。国旗が不利な状況に陥ったら、助けに行かなければならない。

「智仁勇」は元々儒教が提唱する三つの徳のことである。『論語』に「智の人は惑わず、仁の人は憂えず、勇の人は恐れぬ」と記載されている。中華民国が創立した後、中華民国の「国父」と呼ばれる孫文は、「智仁勇」を「軍人精神の三大要素」として再解釈した。彼が考えた「智仁勇」は、国と民族のために、自分の身を捨てる献身的な精神が含まれている<sup>(28)</sup>。このように見ると、愛国精神と愛国教育を強調し、何よりも国家の利益を第一にするべきだと主張する余極のこの論は、「軍人精神の三大要素」を女性解放運動に導入しようとした論と思わざるを得ない。

基本的に、『女聲』に載っている婦人論は、女性は国家に貢献する責任があるという傾向がある。意見が対立しているのは、どのように貢献すべきかという点である。つまり女性は家庭という範囲内で貢献すべきか、或いは男性と同じく国民として働き、ないしは前線まで行くべきかという問題である。

前者を支持する論者の代表者である李蘊氷(出自不明、『女聲』の巻頭言に当たる「先聲」によると、特別寄稿者である)は、女性は「合理的な現代家庭」を築き、「国家の良好な細胞」、そして「大東亜を守る盾」になるべきだと強く呼びかけている。(「理想的家庭」(「理想の家庭」) 116) また、『女聲』編集の関係者である孤嶼(『女聲』の巻頭言を書いているため、『女聲』編集者たちと関係があると考えられる。

また、「大東亜共栄」に関する発言も『女聲』で確認できる）は、「水  
與人生、水與女人」（「水と人生、水と女性」314）で、女性が国家に  
貢献する方法について以下のように述べている。

日本語訳…国にとって、女性はずしも参政しなければ国家に  
貢献できないことはない。特に今の戦争の時代、女性も銃後で働  
き、かつては男性がしていた仕事を担い、国家に貢献している。  
全てに女性が参入している。

彼女たちの貢献は、前線で犠牲になった兵士たちの命と同じ価  
値がある。特に母になった女性たちは、このような困難な状況で、  
将来の戦士を生み育てた。この偉大な責務は男性が取って代われ  
ないものだ！

このように、女性は「生育」と男性の後方支援において、最も価値  
があると判断されている。女性は、子供を産んで、軍隊の後備軍を作  
る。食料を栽培して、布を織って、軍隊に食料と服を提供する。さら  
に、大部分の男性は軍隊に入ったため、これまで男性が従事していた  
事業も女性で補う。このような考えは同時期の日本の戦時政策と似た  
ものであった。一九三九年以降、日本政府も、労働力の激減に伴って  
女性動員政策を打ち出していく。勤労報国隊や女子挺身隊が編成され、  
女性の社会生産での活躍が期待された。実際、洛川『新中国報』の記  
者。上海淪陷期ではルポルタージュに専念していた）も（「日本も、稿  
者注）今現在、「花嫁学校」を廃止して、女性が戦時の体勢で各事業に  
参入して増産のために努力することを主張し始めたそうだ」（「女性職

業的新姿態」（「女性の新しい職業」316）と、日本の戦時政策につ  
いて言及している。

また、後者に賛同する人の代表者である関露は次のように述べてい  
る。

日本語訳…女性の主な仕事は裁縫と料理に限らない。女性は社  
会と国家において一人の人民であるため、たくさんの人を助け、  
公民として国家に貢献するべきである。家庭の事務は、あくまで  
女性が家に帰った後の個人生活における一種の暇つぶししか  
ない。（「從「中國的女人道」到「男人煩惱」」（「中国女性の道」か  
ら「男人の悩み」まで」314）

このように、関露は女性の独立の必要性と女性の個性を強調してい  
る。女性は妻と母親という身分である以前に、まずは一人の国民であ  
るため、国家と社会を優先すべきだと主張している。そして、女性の  
家庭生活を「個人生活における一種の暇つぶしではない」と定義し  
ている。

『女聲』の「女性と国家」に関する論は、一九三〇年代の女性雑誌  
と同じく、ほとんど女性が国家に貢献する責任があることを認めるも  
のである。しかし、女性が国に貢献する手段をめぐって、革新派と保  
守派という二派に分かれている。執筆者の陣営から見ると、保守派の  
執筆者は親日文人（知堂、馬博良、橋上客（本名は周宗琦、上海同濟  
医学院の教授）ら）が多く、革新派の執筆者は共産黨員（関露、包不  
平（本名は丁景唐、『女聲』に詩歌を多く投稿している）、席明（本名

は鮑士用、労働組合のメンバー）ら）または進歩的知識人（洛川ら）が多いと考えられる。

## おわりに

以上、雑誌『女聲』において、一九三〇年代の「婦女回家」・「良妻賢母」論争、および「女性と国家」の問題がどのように論じられたのかについて分析してきた。

総じて言えば、一九三〇年代の各女性雑誌に見られる論調は、一九四〇年代の『女聲』でもほぼ同様に確認することができた。一九四〇年代の「婦女回家」・「良妻賢母」などの女性問題についての議論は、一九三〇年代の議論と大きな変化が確認できず、停滞していると言える。また、最終決戦前後、上海は日本の統治下にあつたため、一九三〇年代のように公の場で「反日反帝国主義」の主張をすることはできず、「女性と国家」の関係の問題は戦時の女性動員などの政府政策に吸収されていた。

また、論の内容から言うと、『女聲』の場合は、保守的な論は一六編、進歩的な論は四〇編（その内関露の論が一三編）があり、進歩的な論が圧倒的に多い。しかし、『婦女生活』、『女子月刊』などの革新派（または急進派）の雑誌と比べると、最も進歩的な雑誌とは言えない。また、古い「良妻賢母」主義と「旧い道徳」を提唱する保守派の論も散見され、やや陳腐なものに見える。なお、当時国民政府が推進していた「新生活運動」「婦女回家」などの政策に関する論を多く掲載するこ

とで、国民政府のプロパガンダ雑誌としての機能を果たしていることは否定できない。

一方、従来の『女聲』研究において、『女聲』の女性観は編集者の田村俊子と関露の女性観とほぼ同じものとして理解されてきた。確かに、『女聲』の婦人論のほとんどが編集長の田村俊子に関心を持ち続けてきた内容である。しかし、各婦人論の具体的な意見は、俊子の思想と必ずしも一致しない。読者交流欄（「信箱」）で、羅紋の「知識女子心目中最合理想的対象」（知的女性達の理想的な恋人（118）について、読者から反対の声が届いた際に、俊子は「見解が正しいかどうかとは関係なく、文章の内容が真実で、一部の人の本当の考えを代表できれば」（「信箱」119）、青年たちに見せるために掲載すべきだと述べている。つまり、『女聲』における婦人論に保守派と革新派両方の意見が存在したのは『女聲』の執筆陣、『女聲』の政治背景によるものでもあるとともに、俊子自身の意向を反映したものであつたと考えられる。俊子は、社会における様々な意見があるがままに読者に提示しようとしているのである。実際に、『女聲』の婦人論もこの意識が反映されたため、多様な意見が混在していると言える。

この点から言うと、『女聲』の婦人論における各党派の論争は、読者たちに他の女性雑誌より全面的な世論状況を提示し、より多角的な視点を与えている。また、国民政府の政策を宣伝したとはいえ、「新生活運動」などの政策は国民の日常生活と関わっており、知っておくべき内容でもある。さらに、プロパガンダ雑誌とはいえ、共産党の地下黨員と進歩的文化人の論を掲載したため、反資本主義、または共産主義をほめかす内容が見られ、プロパガンダ雑誌の範囲を超えていると

言うべきである。

## 注

- (1) 趙蓓紅「近現代上海女性新聞雜誌史（一八九八—一九四九）」（『近現代上海婦女報刊史（一八九八—一九四九）』華東師範大学、二〇一九年五月）
- (2) 前山加奈子『『婦女園地』とその「園丁」たち：一九三〇年代中国におけるフェミニズム論』（『駿河台大学論叢』第七号、一九九三年）『女子月刊』をめぐって：1930年代中国におけるフェミニズム』（『駿河台大学論叢』第三八号、二〇〇九年）、村田雄二郎『『婦女雜誌』からみる近代中国女性』（研文出版、二〇〇五年）、楊妍「近代中国における新国民育成の一考察——『婦女雜誌』初期の家庭教育関連記事を中心に（一九一五年—一九二〇年）」（『国際文化研究』（オンライン版）第二七卷、二〇二二年三月）など。
- (3) 注（1）に同じ
- (4) 山崎真紀子「田村（佐藤）俊子から左俊芝へ、戦時下・上海『女聲』における信箱——「私たち」の声のゆくえ」（『アジア遊学戦時上海グレーゾン：溶融する「抵抗」と「協力」』勉強出版、二〇一七年）
- (5) 段毅琳「日本占領時期の「女聲」雑誌に見る女性観の研究」（『常磐台人間文化論叢』三号、二〇一七年）
- (6) 本稿における『女聲』の作者の個人情報 は全て涂曉華の『上海淪陷期「女聲」雑誌研究』（『上海淪陷時期《女聲》雑誌研究』中国伝媒大学、二〇一四年）を参照した。
- (7) 吳佩珍「上海時代（一九四二—五）の佐藤（田村）俊子と中国女性作家関露——中国語女性雑誌『女聲』をめぐって」（『比較文学』四五号、二〇〇三年）
- (8) 桑原ヒサ子『ナチス機関誌『女性展望』を読む：女性表象、日常生活、戦時動員』（青弓社、二〇二〇年）三三二頁。
- (9) 注（8）に同じ、三三八頁。（引用元：\* Die Rede des Führers auf Dem Frauentag in Nürnberg am 8. September 1934, NS-Frauen-Warte, 3. Jg. H. 7 (2. Septemberheft 1934)）
- (10) 注（8）に同じ
- (11) 林語堂が発表した「婚嫁と女子職業」（「結婚と女性職業」『論語』第二四期、一九三三年）という論が引き金になり、一九三三年から一九三七年にかけて、「婦女回家」をめぐって当時の多くの新聞雑誌、特に婦人雑誌において論争が起こされている。また、一九四〇年代初め、日中戦争による騒乱がひとまず終息していた時期に、国民党の女性職員を大量に削減する行為により、「婦女回家」の主張は再び登場した。
- (12) 宋晨露「女性与国家：『婦女週刊』与『婦女生活』“新賢妻良母主義”論戦研究（1935—1948）」（『女性与国家：『婦女週刊』と『婦女生活』における“新賢妻良母主義”論争の研究（1935—1948）』安徽大学、二〇一八年五月）を参照した。
- (13) 江上は、A B C D と分類した四類の言説の特徴について、それぞれ以下のように説明している。A…賢妻良母派（清末型）

…「西洋近代的なものを否定して清末の主張へ戻そうとするもの」である；B…新賢妻良母派（近代家族型）…「近代的な小家庭」における「新賢妻良母」たることを求めたもので、「女性の社会進出をいっさい否定するのではなく、社会的役割を果たしうる少数女性の価値を認めていた」；C…新賢良派（家庭・職業両立派）…「婦女共鳴」の主張する「新賢良」とは、「男女平等」実現のためには「賢妻良母」とともに「賢夫良父」が不可欠とし、両性の貞操を重視するもので、「やはり旧来の性別分別意識と貞操意識とが濃厚で、「近代家族」イデオロギーを支える「成員間の情緒的紐帯」を過信してもいる」；D…賢妻良母否定派（経済自立・社会変革型）…「この派の人々は、女性の家庭役割に価値を認めようとはせず、また、経済的に自立することと女性解放の大前提としながらも、現実には満足のいく職業獲得が至難であることを痛感していた」。（江上幸子「中国の賢妻良母思想と「モダンガール」——一九三〇年代中期の「女は家に帰れ」論争から」）（早川紀代、李熒娘、江上幸子、加藤千香子編『東アジアの国民国家形成とジェンダー』青木書店、二〇〇七年）

(14) この『女聲』は本稿の研究対象の『女聲』とは別の雑誌である。一九三二年一〇月に上海で王伊蔚によって創刊され、一九三六年から一九四七年まで一時停刊していた。

(15) 戴莎「婦女回家運動之檢討」（『婦女回家運動の検討』『婦女共鳴』第四卷第八期、一九三五年）

(16) 劉王立明談（陳湘筆記）「女子婚後的職業問題」（『女性の結婚後

の職業問題』『教育与職業』第一五五期、一九三四年）

(17) 素娟「賢妻良母之我見」（『良妻賢母についての考え』『慈俚婦女』第二卷第一〇期、一九四一年）

(18) 峙山「答宇晴君…婦女回家庭與賢妻良母の検討」（『宇晴君に答え…婦女回家と良妻賢母の検討』『婦女共鳴』第四卷第九期、一九三五年九月）

(19) 上官公僕「社会女性」（『社会女性』『女子月刊』第二卷第一期、一九三四年）

(20) 羅瓊「賢妻良母」から「賢夫良父」まで…婦女共鳴賢良問題号を読んで」（『从「賢妻良母」至「賢夫良父」…読婦女共鳴賢良問題專号以後』『婦女生活』第二卷第一期、一九三六年）

(21) 旅岡「期望于中国娜拉者」（『中国ノラに望む』『女子月刊』第四卷第一〇期、一九三六年）

(22) 陳蔭萱「婦女問題…読「新賢妻良母主義発見」後」（『女性問題…「新賢妻良母主義の発見」を読んで』『女子月刊』第三卷第四期、一九三五年）

(23) 注（1）に同じ

(24) 繆玉錚「婦女職業的迫切需要」（『女性職業の需要が切迫』『婦女週刊』第五七期、一九三六年）

(25) 君慧「抗戦与婦女生活的集体化」（『抗戦と女性生活の集団化』『婦女生活』第六卷第二期、一九三八年）、楊慧林「目前抗戦形勢和婦女任務」（『今の抗戦情勢と女性の任務』『婦女生活』第六卷第一〇期、一九三八年）、劉衛静「抗戦与婦女」（『抗戦と女性』『婦女共鳴』第一一卷第一期、一九四二年）などを参照した。



(26) 注(1)に同じ

(27) 涂曉華『上海淪陷時期「女聲」雜誌研究』(『上海淪陷期「女聲」雜誌研究』中国伝媒大学、二〇一四年)一五六頁。

(28) 孫中山『軍人精神教育』(青年書店、一九三九年)を参照した。

※付記 中国語引用の日本語訳は全て拙訳による。

(ちょうび、広島大学大学院文学研究科博士課程後期在学)

# **Feminist Theory in the Magazine *Women's Voice*: Feminism in Shanghai in the 1930s and 1940s**

Bei ZHANG

**Key Words:** feminism, Shanghai, Toshiko Tamura, *Women's Voice*

In the 1930s, when the global economic depression hit the world, influenced by the policies of Western countries that tried to restrict women's participation in society, Chiang Kai-shek implemented the "New Life Movement," which advocated the Confucian virtues of "propriety, righteousness, integrity, and shame" in order to cultivate modern citizens, through which traditional phrases such as "Good Wife and Wise Mother" and "Three Obediences and Four Virtues" were revived. In the 1930s and early 1940s, in response to the global situation and the government's policies, there were debates over old moral ideals such as "Women Back Home" and "Good Wife and Wise Mother" in Shanghai media circles. Moreover, in the late 1930s—especially after the outbreak of the Japanese-Chinese war in 1937—the discussion of women's relationship with the state only intensified.

*Women's Voice*, a magazine for women established in 1942, also discussed these problems. In this paper, I analyze how the articles in *Women's Voice* addressed the issues women faced in the 1930s in China and explore the magazine's position and its influence on Chinese women. Furthermore, I compare the articles that addressed women's issues, with the editor Toshiko Tamura's own arguments, to shed light on her thoughts and editorial stance during her years in China.